

特集
高知
〜いごっそうとはちきんの国 土佐〜

Special Features
Kochi
Country of stubborn men (Igosso) and lively women (Hachikin)-Tosa

元気なイベント
Lively events

高知の「よさこい祭り」

徳橋裕生

TOKUHASHI Yusei

高知商工会議所/地域振興課



1—よさこい祭振興会

第1回は昭和29年。ビキニ環礁での米国水爆実験、青函連絡船「洞爺丸」の転覆などが世相をにぎわし、台風12・15号と相次いで高知県を直撃する中、下記のスローガンのもとに高知商工会議所の呼びかけでよさこい祭振興会が発足した。

- ・市民の健康と商店街の振興を目的とすること
- ・一回限りの祭りに終わらせず阿波踊りのように永続発展させること
- ・名称は市民生活に溶け込んでいるよさこいを生かし「よさこい祭り」とすること

また、祭りの日程については、過去40年の気象データを分析した結果から、8月の高知市で降雨並びに台風上陸が少ない10～11日の2日間とした。

「よさこい祭り」の第1回を記念して、酒の国・土佐らしい合成酒タダ飲み会や箸拳闘所破り(市内18の料亭や旅館を闘所に見立て、この美人闘守を1本勝負で勝ち抜いていく遊び)などの変わったイベントが開催された。酒が貴重品のこの時代。うわさを聞いて早くから駆けつけた左党は2,000人余り。一石(100升)の合成酒があったという間になくなったそうである。

活動の主体は、商工会議所・県観光連盟・市観光協会・高知新聞社。後援は、県・市・高知放送局ラジオ高知・市商店連盟で、振興会の会長には商工会議所会頭が就任し、直ちに県や市への補助金の要請と企業・一般を対象にした募金活動を開始した。

当時、警察の交通規制が厳しかったため街頭流しはせず、高知公園追手門内の本部と帯屋町2丁目・はりまや橋・本町筋3丁目・愛宕町・菜園場・梅ヶ辻の市内7ヶ所の特設舞台の上での競演となり、21チーム・750人の踊り子が参加した。

2—初めてのテレビ実況中継

第6回は昭和34年。皇太子と美智子さまのご成婚し、国民はテレビの実況にクギづけとなった。その時、高知ではベギー葉山の「南国土佐を後にして」の全国的な大流行で観光客が倍増、折よく3月には高知城の修復が完成して、その記念の第1回お城まつりは大盛況となった。

祭りは一般市民も参加ができるように中央公園に変更された。踊り子隊は鳴子を響かせながら、まず地元で踊り始め、市役所前広場・中央公園・本町筋5丁目・菜園場・愛宕町・梅ヶ辻の6ヶ所の競演場で、43チーム2,500人の踊り子による街頭流しが始まった。男は半裸で女はすねまでの黒つばい上衣を引っ掛けただけの官能的な踊りや古代人を連想する踊りが登場した。

午後1時からは、県内唯一の民放テレビ「ラジオ高知テレビ(後のRKC高知放送)」が実況中継を初めて行い、市役所前広場に設置されたテレビカメラの前は黒山の人だかりができ、次々と繰り込んでくる踊り子たちも、カメラを意識して緊張気味であった。



■写真1—第1回よさこい祭り



■写真2—ニース市内を行くよさこい海外遠征隊



■写真3—オイルショックを吹き飛ばす第20回大会

一方、テレビのある家庭には近所の人々が、電器店の店頭テレビの前には通行人が群がった。

3—10周年は台風で順延も盛り上がる

第10回は昭和38年。国際的にはキューバ危機回避により米ソが急接近し、高知では台風9・14号が来襲した。

南国土佐を代表する祭りに成長したよさこい祭りも10周年を迎えた。43チーム・3,500人の踊り子が参加した。振興会としても県外からの参加が便利ようと配慮し、近隣の徳島・松山からの臨時列車や阪神方面からの観光船などの手配を関係方面に要請した。

ところが、台風9号が高知県に接近し、県西部を中心に被害が出始めた。高知市も朝から台風の影響が目立ち始めたため、本番は8月16～17日に順延となった。16日の昼ごろからは雨も小降りとなり、しびれを切らしていた各踊り子隊はいつせいに街頭へ繰り出し、鳴子の響きが市内全体に伝わり祭りは最高潮に達した。

そして、全チームが参加して10周年記念パレードが最終日に開催された。定刻の午後2時には、小雨もなんのそのと、参加チームが本部競演場に勢ぞろいし、鳴子を響かせながら東へ西へ踊り絵巻を繰り広げた。

4—災害で沈んだ心を吹き飛ばそう

第19回は昭和47年。米国ではウォーターゲート事件によりニクソン大統領が辞任し、ミュンヘン五輪の選手村ではパレスチナゲリラによりイスラエル選手が射殺される事件が起き、世界を驚かせた。

この年、県内ではよさこい祭りを目前にした7月5日、集中豪雨により土佐山田町繁藤で山崩れが発生し、防災活動をしていた地元消防団ら60人が生き埋めとなり、台風県の高知でも前例のない大惨事となった。

振興会は、被害者に弔意を表し、よさこい祭りを8月

29～31日に延期した。

29日の踊りの初日には、繁藤災害による重苦しい空気を吹き飛ばそうと、43チーム・3,500人の鳴子の音色が街頭や地区競演場で早くから響き渡った。2月にフランスのニースに海外遠征した選抜チームもサンバ調の踊りを披露して、割れるような拍手を浴びた。

5—オイルショックにも負けず

第20回は昭和48年。6月に第4次中東戦争が勃発し、石油輸出国機構(OPEC)は原油生産の削減と値上げに踏み切った。石油価格の高騰は、エネルギーを中東の石油に依存してきた日本を直撃した。世に言うオイルショックである。わが国においても物価は上昇、10月からトイレットペーパーや洗剤が売り惜しみと買占めで店頭から消えた。

このような時代背景の中、よさこい祭りは20回目という節目の年を迎え63チーム・5,500人が参加した。振興会は市外から参加を希望しているチームのため巡回指導を実施することに決定し、また「物故功労者」「現在功労者」「15年以上連続参加チーム・個人」等を表彰することも決めた。



■写真4—半世紀を迎え2万人が競演した第50回大会



■写真5—第51回大会でユニークな衣装で鳴子を響かせる



■写真6—第52回大会

本番の踊りでは、オイルショックを吹き飛ばそうと踊り子たちのハッスルぶりは例年以上であり、街頭も競演場も、スピーカーから流れる伴奏や小気味よく響く鳴子が盛大であった。見物客も県外からどっと押し寄せ、中心街は人また人の波で祭り一色となった。また、この年は初出場チームが目立った年でもあった。

6——主流は若い人たちに

第34回は昭和62年。米国の財政赤字が国際的な注目を集める中、わが国では内需が堅調に拡大し経済は伸張局面に入る。県内においては、4月の国鉄解体によってJR四国が誕生した。

この年の振興会は、踊り子隊の後進は禁止、チームの人数は150人以下といった制限を行った。また、論議を呼んでいる大音量の伴奏については、高知市環境課に依頼して、本部競演場など2ヶ所で音量測定器による初めての測定を実施した。

8月10日には、土佐路の夏になくはならぬ風物詩となった鳴子踊りが始まり、113チーム・14,000人は地元の各練習場で足ならしにひと踊りした後、一斉に街頭へ繰り出した。音楽もアップテンポが主流になり、シンセサイザーを使ったチームや流行のラップ調を取り入れたチームなど若い人たちが主力となり、見物客も大喜びし、伴奏の大音量も気にするどころか踊りは最高潮に達した。

本部席の振興会の面々も時代の変化が来たと感じている様子であった。

踊り子の中には、本場の土佐で踊りたい県外観光客や観光親善の旅でやってきた人たちも数多くいた。こうして商店街に鳴子の音を響かせながら熱い土佐の夏は過ぎていった。

7——パワフルな南国土佐のカーニバル

第38回は平成3年。中東では1月に湾岸戦争が勃発、ソ連では7月に69年に及ぶ社会主義体制が崩壊した。わが国においては過熱していた土地投機がついに破綻、バブルが崩壊し倒産企業が全国で646件にも達した。

8月9日高知商工会議所100周年に伴い、初のよさこい祭り前夜祭が高知市中央公園で開催され、20チームが華やかに踊り始めをした。

この頃から「南国土佐のカーニバル」と評されるようになったよさこい祭りの鳴子踊りは、参加総数137チーム・16,200人に達した。

青空が広がる追手筋で、競演開始前から会場の両側をびっしりと埋めた見物客がざわめく中、トップを切って登場したのは、ブラジルから来たサンパチームの8人であった。踊り子たちは見事なプロポーションを弾ませながら本場のステップを見せ付け、これにはさすがのよさこい祭りの見物客も拍手を忘れるほどであった。

また、この頃から各競演場の接待所では、テーブルの上に100個以上の紙コップを並べ、氷水や麦茶を供していたが、チームが出入りする度に、あっという間に消える。この量は、大きなポリバケツで1日に40杯以上であった。しかしながら、踊り子たちにとっては接待所が砂漠のオアシスであり、唯一の憩いの場でもある。このように、入れ替わり立ち代りするチームで、どこの競演場の接待所でもてんこ舞いだった。

8——40周年

第40回は平成5年。主要製造業の景況判断指数はマイナス56で、戦後最悪の第1次オイルショック時のマイナス67に次ぐ事態となった。

40年の集大成として実りある祭りにしたいとの考えから、振興会は記念事業計画を決定し、8月8日に40周年



■写真7—第53回大会

記念フォーラムを開いた。第1部は記念式典、第2部はシンポジウム、第3部は祝賀会で構成した。

本番の10～11日を待ちかねていた各チームは、競い合って競演場へ繰り出し、昼頃から町全体が舞台のように盛り上がった。鳴子が響き地方車が賑やかに行きかう帯屋町アーケード街辺りでは、一息入れる汗まみれのチームもあって大変な混雑となった。ボリュームを最大にした地方車が入り乱れ、その大音響に逃げ出す人も出たくらいであった。40回の記念大会にふさわしく144チーム・16,500人が乱舞した。

9——半世紀を迎えて

第50回は平成15年。イラク戦争が勃発した年、高知競馬で連戦連敗中のハルウララが全国的な人気となり、12月にはついに100連敗を記録した。

よさこい祭りは半世紀の歴史を刻み、大きな節目となる50回目を迎えた。

記念パレード・よさこいアベニュー(県内外の観光客に本場の踊りを体験していただくとう本部追手筋競技場を開放)・50周年パネル展・記念植樹等の各種イベントが開催された。

8月10～11日の本番には各競演場で187チーム・20,000人が競演し、昔も今も変わらない踊り子たちの笑顔と鳴子の音が響いた。そして、本部競演場に登場する頃には汗びっしょりとなり、これまた汗びっしょりの栈敷席のお客さんと一体となって踊り、夜になるとますます盛り上がりを見せた。

この50回の節目の記念大会では参加チームが更に増え、これに対応するために、振興会は本部競演場での本番の2日間(昼の部・夜の部)とも開始時間を30分繰り上げた。しかしそれでも本部競演場で踊れるのは170チームが限界であり、オーバーした場合は抽選で決めること

とした。また、初出場や10年以上参加実績がないチームのように本部競演場で踊れなかったチームも、各競演場では自由に踊れた。

10——祭りの経済波及効果

平成18年度に調査したところ、187チーム20,000人が参加し、全国区に成長したよさこい祭りの経済波及効果は78億9,100万円である。内訳は直接効果(よさこい祭りによる高知県内直接支出額)が48億6,400万円、間接1次波及効果(原材料を他の産業から購入することによって起こる波及)が17億4,600万円、間接2次波及効果(直接効果、間接1次波及効果によって生み出された雇用者所得の増加が個人消費の拡大を通じて再び生産を誘発する効果)が12億8,100万円である。直接、需要が増加する産業は、当然その生産誘発額も大きい。よさこい祭りのように直接的に需要が発生しない産業においても、様々な産業への間接1次2次波及効果がみられる。

雇用についても、就業者数を県内生産額で除して得られる就業係数を用い、就業者数を算出すると1,053人の就業機会を創出することになる。また、就業者総数から個人事業主と家族従業者を除いた雇用者数を県内生産額で除して得られる雇用係数を用いると、雇用者数では789人の雇用機会が新たに生まれることになる。

このように、よさこい祭りの経済波及効果は、地元にとっても大きいものなのである。

11——よさこい祭りの今後

市民の健康と商店街の振興を目的として始まったよさこい祭りではあるが、近年、事業面においては、参加チーム増加に伴う大音量や交通渋滞・ゴミ・未成年の逸脱行動が問題となっている。一方、財政面においては、補助金カットに伴う新たなスポンサーの獲得等の諸問題が発生している。振興会としては、関係団体・参加チーム・市民・県民の皆様のご理解、ご協力をいただきながら、一つ一つ解決していきたいと考えている。

そして、いごっそうとはちきんたちが自らつくり、発展させてきたこの祭りを、守り、伝えてゆきたいと思う。皆様も、是非、南国土佐のカーニバル・高知のよさこい祭りにご参集下さい。

<写真提供>
社団法人高知市観光協会